

国府遺跡大串第18号人骨と縄文鉢形土器の穿孔

—考古学における相同性と相似性—

山口 卓也

1. 考古学における相同性と相似性

19世紀から科学としての体裁を整えた考古学は、「地層累重の法則」や技術形態学的分類法など基本的な研究手法の段階で、自然分野の諸科学から多く解釈のための原理を借用してきた。「相同と相似」という概念も、しばしば潜在的に応用されている。

進化生物学における系統発生と個体発生において、生物の持つある構造が共通の祖先から生じた場合、「相同性がある」または「相同である」といい、そのような器官を「相同器官」という。共通祖先を持たない類似性は「相似性」と呼ばれる。例えば、昆虫類の「翅」と蝙蝠の「翼」、鳥の「翼」は、それぞれ形態的・機能的には「相似する」「相似器官」と呼ばれ、進化的には異なる系統であったため、「相同ではない」と表される。相似的な構造は、それぞれ種として異なる経路で進化する過程があったにも関わらず、異なる由来の器官が同じ機能を持つように進化した証拠であり、これは「相似器官への収斂進化」と呼ばれる。

国府遺跡大串第18号人骨に伴って発掘された重要文化財指定縄文鉢形土器は、平成18年度に修復を行ったが、この時、土器の底部に穿孔があったことが判明した。ここでは、この縄文鉢形土器底部の穿孔と国府遺跡の大串第18号人骨の出土状態を、発掘調査当時の状況を踏まえながら、その埋葬状況を再検討し、考古学における「相同性と相似性」という事例に言及してみたい。

2. 大串第18号人骨と縄文鉢形土器

大串第18号人骨は、ほぼ全身の骨格が残った屈葬で、頭部を東南東に向ける。頭部に縄文土器破片10片を被せ、玦状耳飾が付随する。遺体の胸上に穿孔のある鉢形土器を乗せる。

胸部左右に長幅20cm余、厚5~7cmほどの花崗岩自然石があり、頭部に土器破片、胸部に石と鉢形土器の両方が置かれた状態で、いわば「覆鉢・抱石葬」と呼称できる状態である。縄文期の遺構面が大規模に削平されていること、人骨周辺がく

ぼんで発掘され、埋土の色調も異なることから、墓穴の底部が残存していると推定される。成人男性の人骨である可能性が高い(池田次郎 1988)。大串18号人骨は、土器の副葬、覆鉢・抱石葬で、玦状耳飾を装着することから、縄文前期埋葬の中で例外的な「厚葬」として有名である。

大阪毎日新聞大正7年8月17日、岩井擁南「河内国府第四回発掘調査(九)A地域の人骨」に、破片を接合したという記載があることから、発掘時には破損状態であった鉢形土器を復元して完形にし、さらに人骨周辺を整えてから写真撮影したことが判明している。ここからは、縄文鉢形土器に穿孔があり、破片だった土器を復元してから撮った写真であるという従来知られなかった事実を踏まえて考えてみたい。

頭部に付着する非接合縄文土器片とは異なり、この縄文鉢形土器は、一括して一個体分の破片が出土したものである。発掘時に容易に復元されているので、飛び散った状態ではなく、一か所で押し潰された(圧壊)状態であった可能性が高い。写真にあるように、顎骨と胸部の間で検出したのだろう。

人骨の頭部から胸部にかけての部分に、非接合縄文土器片と、この圧壊した縄文鉢形土器、左耳玦状耳飾などが密集した状態だったことになるが、どれも頭骨上ではなく、顎から頸部や手前の下位の位置に検出されている。

この発掘時の状況を、真上から見下ろせば、



図1 国府遺跡大串第18号人骨と縄文鉢形土器(破片となって出土したが、復元されて完形状態である。)

非接合縄文土器片は、頭骨上から手前下の方向に、「滑り落ちた」状況にあるように観察される。玦状耳飾についても、横臥した頭部の左耳朶から、やはり同じように滑り落ちた状態に見える。全体として、大串第18号人骨は、墓穴中の土圧や後世の人為的な圧迫で縄文鉢形土器の圧壊が生じ、そのほかの遺物も本来の位置から下位へ移動している可能性を指摘したい。写真中の人骨手前の抱石も、移動の可能性がある。

3. 大串第18号人骨の埋葬

それでは、本来の大串第18号人骨の埋葬は、どのようなものと考えたらよいだろうか。頭部に土器破片、胸部に石が置かれた状態で、「覆鉢・抱石葬」と呼称できる状態に復元されることには変わらないが、穿孔のある縄文鉢形土器の本来の位置は頸部から頸部付近ではなく、完形のまま頭骨上にあったと推測する。



図2 縄文鉢形土器 底部の穿孔

この穿孔のある縄文鉢形土器は、穴を穿つという点で、縄文時代埋葬習俗との関連が指摘できる。その年代から、埋葬の発現期として位置付けが可能である。縄文時代埋葬では逆置埋設が広く行われるので、第18号人骨上のこの土器も逆置であった可能性が考えられる。この場合、屈葬された遺体の頭部に、鉢形土器を逆さにして被せ、土器内に埋土が充填されない場合には、煙突のような「気道」として設置されたという高度に構築された「遺構複合」が復元できるのではなかろうか。この復元は、埋葬人骨と組み合わさった縄文期埋葬例が希少であるので、現時点では考古学的「単一」事例であるに留まる。進化生物学の「突然変異体」、種として固定される途上の個体例に相当するだろう。

広く事例を探せば、ここで詳述しないが、北海道のオホーツク文化の埋葬にきわめて似た埋葬例がある。オホーツク文化は、オホーツク海



図3 北海道網走市モヨロ貝塚（モヨロ貝塚館）の埋葬 検出面（逆置された土器の底部穿孔が見える。）

岸を中心とする北海道北海岸、樺太、南千島の沿海部で、海獣狩猟や漁労を中心とした文化である。北海道に分布している遺跡の年代は5世紀から9世紀までと推定されており、近畿地方の縄文時代前期の国府遺跡大串第18号人骨の埋葬とは、時空が隔たっている。両者の間は、考古学的解釈原理上は「無関係」であり、進化生物学のいう「相同性のない」「相似性のある」現象を認めることができる。

このような相似例は、人的存在である行為者が、人の「死」という人類共通の出来事に、自身の精神活動として対応したという共通の根源をもちながら、それぞれに発生した現象であるといえよう。人的行為としては、「死を巡る普遍的な行為」の結果である。これが考古学的に検出されたものが、それぞれ事例として把握されているのだが、根源的な段階では「収斂進化」を認めることができるであろうか。紙面を改めて、再論してみたい。



図4 北海道網走市モヨロ貝塚（モヨロ貝塚館）の屈葬（頭部上に逆置土器が被されるが、この土器の底部あたりに墓穴の遺構面がある。）

博物館学芸員